

# 用手法から機械化の時代変化へ次世代に伝えたいこと 検査技術の進化と臨床検査技師の真価 ～検査の「不易流行」を考える～

◎福吉 葉子<sup>1)</sup>

熊本大学病院 輸血・細胞治療部<sup>1)</sup>

バブルが弾け始めた昭和の終焉に就職し、その後平成、令和と3つの時代を過ごしてきた。入職した当時を振り返ると今では当たり前である標準作業手順書は整備できておらず、先輩の背中を見て仕事を覚えるような職人気質の中、検査品質は専ら検査技師の技量と知識（経験）に委ねられ、標準化や精度管理に関してはまだまだ発展途上の状態であった。

80年代に入り検査の自動化は一気に加速し、用手法の課題であった検査者の差は解消され、検査の高速化と標準化や精度管理の実施による検査精度の向上がもたらされた。私が専門とする「輸血検査」は、他の検査に遅れること10年、90年代から徐々に自動化され始め、昨年度の日臨技サーベイの実態調査では、血液型検査46%、不規則抗体検査66%の医療機関で半自動もしくは全自動分析装置の使用が報告されているが、未だ試験管法による運用施設も多い状況である。輸血過誤の原因調査における検査側の要因には、結果誤判定、結果誤記載（誤入力）等ヒューマンエラーによるものが多く、用手法で行う試験管法は凝集像を目視判定するため輸血非専任技師からは、「輸血検査は怖い」という声をよく耳にする。当院では1997年に自動分析機導入を機に検査技師による輸血検査の24時間体制が開始され、時間外における検査品質が担保された。当然のことではあるが、自動分析装置ですべてが解決するわけではない。装置の特性を十分理解した上、得られた結果の解釈や「予期せぬ反応」への対応については問題解決スキルが求められ、検査技師の真価を問われるのである。

松尾芭蕉が残した「不易流行」という言葉がある。「不易」とは時代が変わっても変わらない本質的な真理であり、「流行」とは、時代に合わせて変化することである。すなわち、「不変の真理を知らなければ、基礎が確立せず、新しく変化しなければ、新たな進歩がない」という解釈になる。今後、AI など技術が更に進化し続ける未来において我々臨床検査技師が真価を発揮するには、何が「不易」で、何が「流行」かをしっかりと見極めることが重要ではないだろうか。